

ほのぼのの八色

ポテカルゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ほのぼのを書きたいだけの人生だった…

ってゆうか、Part2☆から付き合ってる設定って書いた方がいいですかあー？てへっ

目次

P a r t 3 ☆	(一色いろは誕生日なのです☆)	13
P a r t 2 ☆		8
P a r t 1 ☆		1

Party☆

「セーラーぱーいー、疲れましたあ」

11月。外も寒くなり布団から出れなくなるこの季節。

休日には昼まで布団から出れなくてだらだらしているはずが…なぜか、俺は休日出勤している。

理由は一色以外の生徒会メンバーがインフルエンザで倒れ、ちなみに奉仕部のメンバーも風邪で倒れ…

月曜日にある学校の大事な人会議用の資料が間にあってないからということである。

いつもながら一色が奉仕部に助けを求めるのだが俺以外の二人がダウンしてるため俺が一人で手伝っているという状態である。

「せんばあい、あなたの唯一の後輩はもうダメですう…」

「一色、頑張り。ほら、マッ缶やるから。」

「また、そのコーヒーですか… それ、甘過ぎますう…」

「マッ缶を舐めるなよ… この糖分が頭に回って仕事の回転率があがってはかどるのだ。」

「それはせんばいだけです… 1回、休憩にしましょう!」

「休憩… するか。」

ふと、時計を見ると針は12時をまわっていた。9時から資料作成してもう3時間も経っていたのだ。

作成中、一色から話しかけられながらも頑張っていたが午前中では終わらなかった。

「ふっふっふっ…」

「突然、どうした?」

「じつは… せんばいにお弁当を作っているのです!」

「はいはい、あざとい。」

「ほんとですよ!ほら!」

一色のカバンから出てきたのはピンクの可愛らしい弁当と黒の

男っぽい弁当だった。

「え？なに？それどうしたの？」

「手伝ってくれてるのになにもしないのはダメだなーって思っ
て弁当を作ってきたわけですよー！」

ちよつとドヤ顔で言われた。両手を腰につけてドヤ顔してるから
腹立つ。可愛いが。

「まあ…ありがとうな。昼飯どうなるか分かんなかったか
ら。」

「仕事の量がどんなものか教えてなかったので…ごめんなさ
い。」

作成が午前中で終わるかなって思ってたら意外と多かったのだ。
これを一色はギリギリまで一人でやってたから流石だ。

でも、ギリギリになる前に少しは頼れな。唯一の後輩よ。

「しょうがねえよ。仕事の量の多さ、少なさなんて誰にも分か
んねえ。まあ、量じゃねえよ。質だ。質が悪かったらまた、1からの
やり直しだからな。」

バイトでもそうだ。バイトの一人が1時間で終わったとしてもめ
ちやくちやな場合が多々ある。そういう時に限って正社員は手を触
れてない。

次の日に俺が一からやり直した時に時間が取られるのだ。

しかも、めちやくちやの仕事内容を正社員にみられたら俺に言うん
だぜ？まじ、意味わかんねえよ。俺がやってる時にしかみてないんだ
ぜ？あいつら。

こういう理不尽を受けて大人になっていくんだなって思ったわ。

「まあ、一色の仕事は丁寧だから助かってるよ。」

「あ、ありがとうございます…。」

なに、照れてるの？あの一色が？まじ？めっちゃ破壊力あるじゃ
ん。

「それはそうと、弁当食べましょうー！」

「お、おう、そうだな！」

弁当を開けるとまず目に入ってきたのはハートマークだ。いやいや、あざとすぎでしょ…

「あざと…」

「あざとくないですー！日頃の感謝をこめてハートにしてみましたー」

「なら、戸部とかにも作ってやれば？」

「戸部先輩は弁当作ってあげるほどの仲じゃないので…」

「あ、そう。なら、葉山は？」

「葉山先輩はー、ハートマークとか嫌いな気がするんですよー。」

そんな感じはするはする。葉山は普通の弁当でも女子を喜ばす能力持つてるけどちよつとズレた弁当は褒めづらそう…

「まあ、いいわ。食えりやなんでも…」

他の弁当の中身は唐揚げとか卵焼きとか普通の弁当あるおかつだった。

「いただきます…」

「あ、もしよかったらでいいんですけど卵焼きから食べてもらえますか？」

一色に言われたとおり卵焼きを食べた。うまい。絶妙な甘さ。ふつくら。どれをとつてもうまい。

もう一つ食べてみた。次は甘くない。甘くないがそこがうまい。

「せんぱい、どっちの卵焼きが好きかなーって分からなくて二種類つくっちゃいました。」

「どっちともうまいぞ。小町が作る時はだいたい甘いやつだけど弁当で甘くない卵焼きは久しぶりに食べたな。ときどき食べたくなる味だし、甘くない卵焼きでは一色が一番だな。」

まあ、弁当作る人が母親、小町の他にいないからな…

「ありがとうございます…」

「え？なに？あの伝統の早口振り芸やらないの？」

「せんぱい…ドMなんですか？」

呆れたように一色が言った。

「ちげえよ！今日は一度も聞いてないから不思議に思ったただけだ！」

「たまにはあれも休む時もあるんですうー」

「そうか…」

「そうですねー、あ、弁当続き食べましょう！」

他のおかずもうまかった。日頃から料理するのはホントのようだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「すう、すう…」

一色はいつの間にか寝てしまったようだ。まあ、食後だし変わり映えのしない仕事だししようがないだろう。

まあ、少しは休ませてあげるか。

けど、ストーブだけの生徒会室だと風邪ひくぞ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「んあ？」

俺もいつの間にか寝てたようだ。あとは印刷するだけのところで集中力が切れたのだろう。

そういえば、一色がいない。あいつ、どこいったんだ…

起き上がるとひらりと何かが落ちた。

カーデイガンだった。多分一色の。

それと女子ものの制服も一緒にあった。一色がかけてくれたのだろう。

その代わりに俺の制服が無かった。どこやったっけーなーって思っていたら一色が帰ってきた。

「あれ？せんぱい、起きたんですか？おはよーございます！」

「おはようさん、で、なんで俺の制服を着てるんだよ？」

「やっぱり、せんぱいのですかー。起きたら制服がかけられ

ていたのでそのまま使っちゃってます。てへ。」

「てへじゃねえよ。」

「でもー、せんぱい優しいですねー。わたしに寒くないように制服かけてくれたりとかー」

「ストーブだけとか寒いだろ。毛布を探したんだがな…あと、それは寝ている先輩に私の制服かけてあげたって暗に言ってる？」

「もぉー、なんなんですかー。純粋な気持ちでかけてあげたのにー」

ほっぺたを膨らませた一色。お前はフグかハリセンボンか？

「てか、一色の制服使う意味あったんですかね…」

「それはー、せんぱいの制服の方が暖かいからですよー。」

「生地的には暖かさ一緒だろ。」

「まあ、なんとなくですよ！なんとなく」

「はいはい、そーですか。」

「あ、せんぱい、仕事すべて終わらせてくれたんですね。ありがとうございます。わたし、途中から寝ちゃってすみません。」

「別にいいわ。弁当も貰ったし。ここ最近、一人で頑張ってたんだろ？お前の方が量的には多いよ。」

「せんぱいのデレですか…誰得？」

「うるせえよ。」

「これからも仕事手伝ってくださいね！」

「休日以外なら手伝ってやる。次は早めに頼れ。」

「いつもなら、嫌とか色々いうのに…やっぱりデレですか？」

「寝起きだからだよ。バカ。ちよつと顔洗ってくる。あ、制服ありがとな。あと、制服返せ。」

「もぉー、しょうがないですねー、どうぞ。」

一色が着ている俺の制服を取り返した。着直すと女子特有のいい香りがしてきたのは気のせいだ。多分。

顔洗って生徒会室に戻った。とりあえず、仕事は終わったから帰る準備

備をしよう。

その前に…

「一色、ほれ。」

一色に紅茶を投げ渡した。これであつてたかな？

「せんぱい、ありがとうございます。」

「まあ、仕事終わりの一服は美味いつて聞くからな。」

タバコとコーヒーな。あれ、最高らしいな。未成年だからタバコ吸えないけど。

「せんぱい、出来るサラリーマンみたいな人ですね。」

「バカ言うなよ。俺の夢は専業主夫だ。働きたくない。」

「その割には手伝ってくれましたね。感謝してます。」

「んなら、帰るか。おつかれー」

「あ、せんぱい、待つてくださいいよおー」

一色があわてて生徒会室に鍵をかけた。その鍵を制服のポケットに入れた。普通に私物化してやがる…

「せんぱい、なんか食べいきましようよー。」

「ええー、もう帰りたい。」

「せんぱいともうちよつとだけ一緒にいたいのです！」

「あざとい。あざとい。で、どこいくんだよ。」

「わたし、せんぱいのせいでラーメンにハマってしまつて…
ラーメンにハマつたはいいですけど一人だと入りづらくて…」

「あ、そう、なら、ラーメンだな。」

「せんぱいのおすすめのラーメン屋教えてください！」

「まあ、ちよつと遠いけどいいだろう。」

チャリを取りいこうとしたら一色も付いてきた。話しながらだけ
ど。

「ほれ、乗れ。」

「二人乗りですかー、せんぱいの後ろで我慢しましょうー」

「いやなら乗らなくていいぞ。帰るから。」

「乗りますよー！待ってくださいいよー！」

後ろに乗った時、あざとく俺に体を密着させてきた。

あの、お胸があたつてるんですが。

二人乗りしてちよつと遠いがおすすめのラーメン屋に連れていった。

一色も満足していただけたようだ。

そのあとは一色に振り回されてウインドウショッピングをしたりプリクラ撮ったり色々した。

本人はカラオケも行きたかったらしい。夜遅かったからまた、今度な。

ちなみに月曜日の会議は無事に終わることが出来た。

無事に終わったことだけでも後輩の為に頑張った意味があったのだろう。

一色は周りからもちやほやされている。でも、その内面はあまり知られていない。そんな内面を今は俺だけにしか見せないということ。はまあ、信用されているのだろう。

一色も何故か俺を信用してくれている。今までの俺の人生の中で嬉しいことだ。

仕事もだいたい一人できるようになっている。生徒会長としての心構えがだいぶできたのだろう。

個人的には頼ってくれなくて寂しいとか思っていないけどな。でも、少しは思っていたり…

余談だが後日、俺が風邪を引いて家に誰もいないときに看病しに来てくれた一色との話は別の機会にしよう。

Part 2 ☆

「せんぱい…朝ですよ…」

「起きてくださいよ。せんぱい。」

「いつまで寝てるんですか？」

「この…起きろー!」

布団を思いつきり捲られ朝の寒さから目が覚めた。日中はあつたかくなってるけどまだ寒い。

「寒い…もう少し寝かせてくれ…」

そういつて俺は布団を頭まで被った。

「この…ダメ人間め…」

「そうですか、分かりました。なら、小町ちゃんにはせんぱいに泣かされたとメールしときます。」

「いや、待て。はやまるな。それだけはやめろ!」

「せんぱいが起きないのが悪いんです!」

「この小悪魔め。」

「はるさん先輩よりマシでしょ。ほら、朝ごはん出来てますよ。食べましょ?」

重たい体をあげ、ベットから降り、寝室からリビングに出ると食欲をそそられる匂いがしていた。

「いただきます。」

まず、卵焼きを食べる。美味しい。個人的には朝ごはんの卵焼きは甘くない方がいい。醤油かケチャップで食べたい。

次に豆腐と油揚げが入った味噌汁を啜る。美味しい。

こいつの食事に完全に胃袋を掴まれている。

すると納豆混ぜてた一色が話しかけてきた。

「せんぱいってほんと、朝弱いですよね。」

「昨日は材木座のせいで小説を添削してやってたんだ。寝たのが3時でな…ふあゝ、眠い。」

「いやいや、今、何時と想ってるんですか?9時ですよ?ちゃんと6時

間は寝てるからいいじゃないですか。」

「俺は休日、10時間寝ないと活動できないの。そりゃ…今日が休日だから…朝方に寝ることもあるけど…」

「朝に寝るとか不健康すぎます。やっぱり一緒に住んでせんぱいの世話をしてあげないとです。」

「一緒に住むってか、お前家、となりだろ？やっぱり自分の部屋があった方がいいと思うのだが。」

「自分の部屋も必要ですけど…やっぱりせんぱいと四六時中一緒にいたいです。最近、やってないですし…」

「こらこら、年頃の娘が朝からそんなこと言わないの。」

「でも、せんぱい、やめてって言ってもやめてくれないじゃないですか！」

「それは一色よ反応が可愛いから…って朝にする話じゃありません！いいから、飯、食べようぜ。」

「誰のせいですか…」

いや、君から始めたんだよ？分かってる？一色さん。

「ごちそうさまでした。」

「今日も美味しかったわ。」

「それはよかったです。」

2人で食器を台所に持っていき2人で食器を洗う。

って言っても一色が洗ったのを俺がふきんで拭き取るだけなのが…

「今日はお掃除しますので手伝ってくださいね。」

「いや、お前の部屋はいいのかよ。」

「こつちに荷物を置いちゃおうかなと。」

「狭くなるわ。」

「せんぱいはわたしと一緒に住みたくないですか…？」

上目遣いで聞いてきた。このやろう…可愛いじゃねえか…

「まあ、住みたくないこともない…が。」

「あとは部屋を借りてるお金を別のことに回せてラッキーっていう気

持ちもありますけどねっ！」

「このやろう。」

ここらへんで説明しておこう。なぜ、俺と一色がこんな関係になったのかを。3行で。

一色に告白される

断る。

俺が告白する

適当すぎだど？いいんだよ。そこらへんは別の話で語るんだから。たぶん。

というわけで一色と半同棲生活が始まってるのだ。

半同棲よりもほぼ同棲だな。毎日来るし。てか、一色がバイトない時は泊まるし。

おかげで食事はがっちり胃袋を掴まれてるし、朝も起こしてくれる。オシヤレさせてくるし、めっちゃ助かってる。

あと、一色脳に毒されてきたようで一色との将来の家庭までもが頭に浮かんでくる。いいよな…

「せんぱい、本の山片付けてくれませんか？本棚買いましたよね？」

「ああ、悪い。すぐに片付ける。」

床の至る所に本を積まれてるので掃除機かけるのに邪魔だったんだらう。

仕方ないだろ。一人暮らしって案外暇なんだから暇つぶしに本ばかり買って読んでたら増えてしまった。

一色とこうやって生活を始めてからは本を読む機会も前に比べたら減ったがまあ、通常の人の本を読むぐらいの時間は本を読んでい

る。

一色と並んで読むことある。てか、だいたい横くる。

一色が部屋の掃除をやってくれているあいだ俺は風呂掃除でもトイレ掃除でもしておこう。

× × ×

「もう、動かない…。」

「せんぱい、どうしたんですか?」

「お前のせいだ…。」

あの後、ほんとに荷物を運びやがって… 何往復したことか… 文系男子をなめんなよ…

「え? 記憶にないですー。てへっ」

「このやろう…。」

「せんぱい、お茶入れましたよー。一息つきましょ?」

「おう、ありがとうな。」

一色は息を吸うように横に座ってきた。

二人で一緒のタイミングで飲む。

「ふう…。」

「もう今日はなにもしたくないな…。」

「ダメ人間ですねえ…。」

「説得力ないぞ…。」

「だって、私も疲れたんですよ…。」

「掃除ありがとな。」

「いえいえです… せんぱいも荷物運ぶのお疲れ様でした…。」

「おう、疲れたわ。」

「そこは愛するいろはのために働けて良かったわ。って言うところじゃないんですかねー」

「そんなキヤラじゃないだろ。まあ、部屋が広くて良かったわー」

「そういえば、ずっと気になってたんですけど、なんで、部屋が広がったんですか?」

「理由はひとつ。小町がいつこつちに来てても大丈夫だろ!」

「うわっ、シスコン… 私も手駒にしてるしやっぱり年下好きなんですねー」

「違うし! 妹のために兄は生きてるのだ。妹のいない兄なんて母のな

「いシショートケーキ？」

「なんで疑問形なんですか、てか、弟がいる兄はどーなるんですか？」

「それはまあ、うん。弟できた時に考えるわ。」

「そういえば、私、弟いるんですよー」

「え？まじ？」

「だから、弟の義兄になった時、その答え教えてくださいな〜」

「それって…」

「冗談ですよー。何を真に受けてるんですか？」

「冗談かよ。びつくりしたわ。」

急に一色が近づいて耳に囁いてきた。

「せんぱいと結婚というか…ずっと一緒にいたいのは本当ですよ？」

「だから… わたしをせんぱいがいないとダメにした責任とつてくださいね」

そういつて、一色の顔が離れた。

そして、一色の顔を見るといつか見たあざとい小悪魔だった。

Part 3 ☆ (一色いろは誕生日なのです☆)

ここは大学の図書館。

高校までの図書室とは違ってひとつの建物そのものが大学の中にある。

そして、広い。たくさんの専門書や辞書、もちろん純文学もあり、最近ではライトノベルまで置いてある。

俺は図書館の3階の一角にある主にライトノベルが置いてあるところで時間を潰していた。

入口が2階にあるということもあり2階の閲覧室は人が多いのだ。本を読む人もいればスマホをずっといじってる奴もいる。

そのため、2階の閲覧室より小さいがあまり人の来ない3階の閲覧室でいつも時間を潰しているのだ。

例えば、勉強したり本を読んだり材木座の小説の添削をしてやりたりといくらでも時間の潰し方はある。

なぜ、時間を潰してるかと言うと…

「せんぱーい、お待たせしましたー」

「まだ、チャイムはなっていないようだけど授業は終わったのか？」

「はい！最初の授業はオリエンテーションが多いので説明を終えた先生が出席票を配って出して終わりでした！」

「この時期はまだ、楽だよな…」

「そうですねー」

「なら、行くか。」

「了解ですっ！」

まあ、一色を待ってた訳だ。つつつ、付き合ってるわけだしな。

×

×

×

図書館から出て大学内のある場所へ向かう。食堂でもいいが人が

めちやくちや多い。一緒に食べるやつのために席をとっていたら周りからの目が痛い。なんでだろうね。

ある場所とは俺が偶然見つけた誰も来ない、言わばベストプレイスだ。そこに戸塚がいてくれたなら完璧だったが：戸塚とは大学離れたんだよなあ：悲しい：

今の時期では桜は葉桜になっているがどういふ訳かそこでは桜が咲いている。狂い咲きというのだろうか？

桜の花びらが舞う中、汚れないようにシートをして一色と2人で弁当をひろげていた。

まあ、俺も分も一色が作ってくれたのだが：

「いただきます。」

俺のは男ということもあり唐揚げが多く入っている。たくさん食べると思った一色の気遣いか。こういうところに惹かれたんだろうな：

「どうしたんですか？そんなに私を見て私の顔になにかついてます？」

「いや、なんもない」

「別にいいですけど…じつと見られると…なんか恥ずかしいですね…」

「あ、いや…そのすまん…」

「なんですか、その反応。可愛いですね。」

「うっせ…」

「もう食べましょ？」

「そ、そうだな。」

唐揚げをつまみ口にほおり込む。美味しい。しっかりと味付けされている。これは昨日からちゃんとし込みをしてたな。

箸が進み弁当を食べ終わった。

「ごちそうさまでした。」

「一色、今日も美味かったぞ。」

「それは良かったです。」

「そういえば、一色はこのあと、授業あるのか？」

「いや、ないです。」

「なら、どっか行くか。」

「え？せんぱいが誘うなんて珍しいですね。」

「まあ、今日は特別な日だからな。」

「まあ、せんぱいが思っていることなんてお分かりですけどね。」

「な、なんのことかな？一色さん。」

「だって、私の誕生日じゃないですか？普通、こんな日に誘われたら気づきますよ。」

「ぐ、ぐぬぬ…」

体が小さくなったどこぞの名探偵ばりの推理力を発揮しやがって

…

まあ、俺がわかりやすいだけでもあるかもね。

「なら…一色、後ろ向いてろ。」

「なんですか？」

ちよつとしたサプライズをな…

「一色、もういいぞ。」

「こ、これ、ネックレスじゃないですか。どうしたんですか？」

「まあ、誕生日プレゼントだよ。一色を驚かせたくてな。」

「むうー、今首に付けるなんていろは的にポイントひくーい」

「しようがねえだろ。一泡吹かせたかったんだよ。あと、小町の真似はやめましようね。」

「デートの後、「一色、愛してる」って言いながら渡してくれたら満点あげたんですがね」

「いや、そんなキャラじゃねえよ。」

「でも、嬉しいです！嬉しすぎてせんぱいをもっと好きになりました！」

「よくもまあ、そんな恥ずかしいこと言えるよな。」

「え？せんぱいは私のこと好きじゃないんですか？」

「いや、そんなことはねえけど…」

「んんー？」

「す、す…好ましく思ってるよ。」

「そこで好きと言えないあたり恥ずかしがり屋ですね。」

一色は顔を近づけてからかかってきた。あなたはからかい上手の一色さんですかね？

「でも、そんなせんぱいに惹かれたんですよね…」

「なんだ、どうした、今日は積極的だな。」

「いいんですよ！今日は私の誕生日なんですから！今日はなんでもお願い聞いてもらいますよー！」

まあ、一色のさせたいようにさせるか。今日ぐらいは…な。

「それでは、デートに行きましょう！せんぱいがこの後の授業ないことはわかってるので！」

「しようがねえな。」

そーやって、一色は立ち上がったが俺は言葉を失った。

立ち上がった一色と散っている桜の花びら。

一色が大学生になり少し大人びた姿で桜の花びらの中を立っている姿はまさに桜の妖精のように幻想的だった。

そういえば、ネックレス渡したのは他にも理由はあるが…デートの後に渡す…本当のプレゼントをバレたくはなかったからな…驚く顔が楽しみだ。